



鹿児島県立  
串良商業高校

進路保障

# 基礎学力の育成と 小論文指導の充実で 進路の選択肢を広げる

◎1903（明治36）年に西串良村立農業補習学校として開校。23年に串良実業女学校、50年に現校名に改称。「敬愛・自律・実践」を校訓として、心身共に健康で豊かな人間性を備え、強い意志と創造性、科学性の涵養を目指す。

<b>設立</b>
1903(明治36)年
<b>形態</b>
全日制／情報処理科・総合ビジネス科 ／共学
<b>生徒数</b>
1学年140人
<b>11年度入試合格実績(現役のみ)</b>
国公立大では、山口大、長崎大、下関市立大、北九州市立大、熊本県立大に合格。私立大は、日本大、九州共立大、九州産業大、西九州大、宮崎産業経営大、鹿児島国際大などに延べ10人が合格。
<b>住所</b>
〒893-1603 鹿児島県鹿屋市串良町岡崎2496-1
<b>電話</b>
0994-63-2533
<b>Web Site</b>
<a href="http://www.minc.ne.jp/kushirashoko/">http://www.minc.ne.jp/kushirashoko/</a>

変革のステップ

背景

◎少子化による生徒数の減少、求人件数の頭打ちなどにより、学校の特色づくりが求められていた

STEP 1

実践

◎進学と就職の両方を追求し、幅広い進路を保障する進路指導改革に着手。生徒指導の徹底、小論文指導の充実を図る

STEP 2

成果

◎生徒が目標を持つことで学校が落ち着き、国公立大に一定数の合格者が輩出するようになった

STEP 3

場当たりのな  
生活指導・進路指導に終始

鹿児島県立串良商業高校は、大隅半島の中ほどに位置する鹿屋市串良町にある、同半島唯一の商業高校だ。

同校が古市通前校長主導の下、「進学も就職も出来る学校」を目指す方針を打ち出したのは、2006年のことだった。同町は鹿児島空港から車で約2時間。電車やバスなどの公共交通機関が少ない地域ということもあり、少子化による生徒数の減少は恒常的な課題だった。同校も、ここ数年で5クラスから4クラスに減り、あと1クラス減れば、近隣校との統合再編は避けられない状況となっていた。また、求人件数は頭打ちの状態が続いており、就職実績の飛躍的な向上も望めなかった。

そうした状況においても、校内に改革しようという機運は生まれにくかった。進路指導部主任の古澤聖子先生は次のように語る。

「当時の本校は、就職・進学指導は担任の裁量によるところが大きく、学校として進路をどう考えるのかという視点が足りなかったように思います。本校は資格取得に力を入れており、合格実績は県内でも上位にありましたが、そうした強みを進路に結び付けるといふ発想がありませんでした。また、生徒の荒れも大きな課題でした。教師の怒号が響くこ

ともあり、一見熱心に指導が行われているようでありながら、その内実は対症療法に終わっていたように思います」

進路指導や生徒指導に一貫性がなく、教師は方向性を探しあぐねている。それが当時の同校の状況だった。



鹿児島県立串良商業高校校長  
**梶原宏司** Kajihara Koji

教職歴37年。同校に赴任して3年目。「人生は出会い。一人ひとりの生徒を大切にしたい」



鹿児島県立串良商業高校  
**古澤聖子** Furusawa Seiko

教職歴17年。同校に赴任して6年目。進路指導部主任。「目の前にいる生徒を我が子だと思って接する」



鹿児島県立串良商業高校  
**福原 健** Fukuhara Ken

教職歴13年。同校に赴任して1年目。進路指導部。「1年生は挑戦、2年生は我慢、3年生は飛躍。諦めないように指導したい」



鹿児島県立串良商業高校  
**岩切真美** Iwaki Mami

教職歴11年。同校に赴任して7年目。進路指導部。「有言実行。やると決めたら、生徒と一緒に必ずやり遂げる」



鹿児島県立串良商業高校  
**国分信哉** Kokubu Shinya

教職歴10年。同校に赴任して5年目。進路指導部。「率先垂範。情熱を持って生徒と接したい」

## 今変わらなければ次のチャンスはない 危機意識が指導の一体感を生む

古市前校長が打ち出した進学・就職両面の充実を目指す取り組みを、教師は商業高校の特長を最大限に生かすチャンスと受け止めた。進路指導部の国分信哉先生は次のように語る。

「本校は資格取得で高い実績を上げていますが、生徒の多くは『商業高校』就職』として捉えています。従来通り就職でも実績を出しながら、取得資格を大学の推薦入試などに生かせば、進学も視野に入れることができ、生徒の選択肢は広がります。資格が取れる上に、就職希望者には就職、進学希望者には国公立大進学も夢ではないと、進路の道筋を明確にすれば、本校はもっと魅力ある学校として中学生にアピールできると思いました」

改革に先立ち、対策が急務とされた課題は生徒指導だった。生徒の多くが指定の靴を履かないなど容儀の乱れに加え、遅刻が恒常化し、年間延べ2000件に達していたからだ。

教師は交替で校門指導を行い、毎朝、全校集会を開いて生徒指導を徹底した。校則違反の靴は没収して反省文を書かせ、遅刻が10回に達したら保護者を呼んで説明を行った。ただ指導を厳しくするのではなく、なぜ遅刻はいけないのか、校則を守る意味は何かを、進路と絡めて、生徒に繰り返し伝えた。

その結果、学校の荒れは徐々に収まっていった。遅刻は多い時の3分の1に減少、交通マナーも大幅に改善した。以前は自分さえよければいいという生徒も多く、授業に真面目に取り組む生徒の邪魔をすることもあったが、授業態度も徹底して指導した結果、落ち着いて授業を受けられる雰囲気が出来た。

「我々が『今変わらなければ次はない』という覚悟を持ち、一枚岩になって指導に取り組んだ結果だと思っています。指導をただ押し付けるのではなく、進路の観点から指導の意味を伝えることで、生徒は進路にも目が向くようになりました。進路の目標が出来ると、生活も落ち着くというサイクルが生まれたのです」(国分先生)

## 進学を希望する生徒に 進路決起集会で覚悟を促す

生徒指導に落ち着きを取り戻し、同校はいよいよ基礎学力向上の指導に乗り出した。改革は指導体制の整備から進め、07年に「数英指導係」「小論文指導係」の二つの分掌を立ち上げた。

数英指導係は、専門学校や国公立大の推薦入試に対応する分掌だ。同校で志望者数の多い医療系や経済学系の入試で重視されることが多い、数学と英語の基礎学力を付けるために、早朝補習や夏休み補習などを行った。



「進路決起集会」の様子。小論文学習を入試まで毎日続けるための意志を固めさせるため、古澤先生はあえて生徒に厳しい言葉で、小論文指導の内容を説明する

小論文指導係は、国公立大の推薦・AO入試指導の中核を担う。担当するのは国語、地歴公民、商業の教師で、国語の教師が小論文の書き方指導や添削を行い、地歴公民と商業の教師は小論文の内容面で必要な知識を指導する。進路にかかわらず、試験に小論文が必要となる生徒が、希望制で指導を受ける。

指導に当たっては、生徒を10人程のグループに分け、国語1人、地歴公民または商業1人の計2人の教師が一つのグループを受け持つ。グループ分けは、特定の教師に負荷がかからないよう、評定平均値や志望大、資格取得の状況などを勘案し、出来るだけ生徒の力が均等になるように行う。合格が決まれば指導は終了するた

め、最終的にどのグループも5人ほどになるという。

指導は、2年生3学期の「進路決起集会」から始まる（写真）。古澤先生が「小論文は、少し勉強したからといって、すぐに書けるものではない。毎日の継続が大切であり、それが出来ない生徒は来なくてよい」と、生徒に揺さぶりをかけて心構えを促す。その気合いにのまれて参加を取りやめる生徒も若干いるが、それでも例年20〜30人の生徒が参加を希望する。厳しく覚悟を促すため、指導が始まった後に脱落する生徒はいないという。

### 自分の考えが相手に伝わる喜びが 生徒の書くエネルギーに

小論文指導の柱は、毎日の自宅課題と放課後学習だ。毎日の課題は、図書室の協力を得て、新聞の社説やコラムを進路指導室の前に常備し、2000字の要約と200〜600字の意見文を書く。意見文の字数は、4月当初は200字だが、400字、600字と段階的に増やしていく。徐々に書く量に慣らしていく。生徒は、放課後にコラムを取りに行き、翌朝のSHRまでに要約と意見文を書いて、担当の教師に提出。これを入試本番まで毎日繰り返す。

この毎日の自宅課題に加えて、放課後にも毎日、小論文指導を行う。小論文模試のテキスト

やワークブックを使い、環境・情報・生活・科学・文化等に関するテーマ学習を行ったり、自ら課題を設定して400〜600字で小論文を書いたりする。必要に応じて、地歴公民や商業の教師が指導や資料提供を行い、小論文を書くために必要な教養や知識を身に付けていく。4月から入試までに書き上げる小論文は、30〜50本に及ぶという。

また、AO入試対策の一環として、グループディスカッションやディベートなども行う。

「話せなければ書けませんし、書けなければ話せません。『書く、話す、聞く』を総合的に取り入れることで、入試や大学進学後の学びに必要な国語力・言語力を高めることを狙っています」（古澤先生）

小論文指導のもう一つの特徴は、国語表現Ⅱと関連付けていることだ。国語表現Ⅱは3年生の選択科目として4単位が設定され、小論文指導を受ける生徒は原則、選択することになっている。授業では、要約の仕方、報告書や手紙、自己紹介文の書き方、小説・随筆の執筆まで、あらゆる文章表現について学ぶ。小論文指導の進度に応じて、教科書の内容を入れ替えて授業を行うこともある。国語表現Ⅱで学んだことを、小論文を書いて使うことによって、より実践的な文章作成の技能を習得させるのである。

小論文の作成や国語表現Ⅱの授業を通して、生徒は自身のコミュニケーション能力の向上を

実感しているようだ。

「それまであまり文章を書いてこなかった生徒が、毎日常約や意見文を書くのは容易ではありません。ただ、『大切だと思ふところ』に線を引き、それをつなげれば要約になる』というように書き方をきちんと伝えれば、次第に書けるようになります。また、自分の考えや気持ちを言葉にして人に伝えることで感動を他者と共有することは、全ての人間にとってかけがえのない喜びです。自分の考えや気持ち相手が伝わる喜びが、生徒の書く原動力になっていくのです」（古澤先生）

## 生徒の「ひらめき」を見逃さず 進路指導に結び付ける

同校では、成績上位層を集めて国公立大を目指すという手法は取っていない。あくまでも、商業高校の進路の中心は就職であり、就職実績が維持できなければ進学も保てないと認識しているからだ。学校は生徒の希望に応じて多様な進路を保障するという立場を取り、最終的な決断は生徒に委ねる。

もともと、生徒が自分の可能性に気付いていないこともあるため、教師は生徒自身には見えていない潜在的な力に気付かせたり、生徒の視野を広げたりすることにも留意する。

商業科の岩切真美先生は、クラスづくりや生

徒とのコミュニケーションを通して、生徒の可能性に肉迫していると話す。例えば、以前、岩切先生のクラスに同校始まって以来といわれる

ほど学力の高い生徒がいた。1年生の時には就職を希望していたが、岩切先生はもっと力を生かせる進路があるのではないかと考えた。2年生で担任になったのを機に、意識的に生徒と話をするうちに、進学か就職かに迷いを感じていることが分かった。岩切先生はそれを見逃さず、進路について共に考え、最終的に進学を薦めたところ、その生徒は在校中に全国高等学校商業協会の8種類の検定試験全てで1級取得や合格を果たし、有名私立大に一般推薦で合格した。

「大切なのは、生徒とどれだけコミュニケーションを取るかだと思います。生徒にうろさいと思われにくい話し掛けていけば、必ずと生徒の本音が見えたり、本人から話が聞けなくても周囲の友人から情報が得られたりすることがあります。生徒一人ひとりのコミュニケーションやクラスの輪を大切にすることが、生徒把握の第一歩だと思います。また、生徒が授業中に見せるひらめきをしっかりと捉えることも重要です。情報の授業で誰も考えないようなプログラミングをする、あるいは簿記の計算で、授業では教えていない解き方をする。生徒の非凡な発想を見逃さないことが、進路を広げていく手掛かりになるのです」（岩切先生）

## 商業高校の使命を果たしつつ 生徒の選択肢を広げられる学校に

改革から5年が経ち、生徒の進路実績は徐々に変化している。これまで通りの就職率は維持しつつ、大学進学者が増加し、国公立大に一定数が合格するようになったのだ。生徒の問題行動もなくなり、学校は落ち着きを取り戻した。更なる学校の発展に向けて、教師の意欲は高まっている。商業科の福原健先生は、今後に向けた決意を次のように語る。

「進学と就職を目標に掲げている以上、教師はどちらの進路指導にも対応できるように指導力を高めていかなければなりません。商業科の教師も資格取得のための指導研究を深め、小論文指導など高度で幅広い知識を身に付けると共に、今まで以上に他教科の先生方との連携を深めることが大切だと感じます」

梶原宏司校長は、商業高校として生徒の希望進路を支えたいと話す。

「本校は商業高校であり、基礎学力に加え、商業の専門教科をきちんと身に付けさせた上で、進学なり就職なりをさせることが大切です。年々高度になる知識や進歩する技術に教師が対応できるように、積極的に大学や産業界との連携を図っていきたいと思います」

自分たちで学校を変えたという自信が、同校を次のステップへと押し上げようとしている。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2011年4月号指導変革の軌跡「岩手県立水沢工業高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)